

不動ヶ岡太田遺跡

—不動の地に建つ古代の寺院—

主任調査研究員 山田喜義

・お題

不動ヶ岡太田遺跡で検出した四面廂付掘立柱建物跡は、なぜ仏教寺院として考えられるのか

を行った不動ヶ岡櫛田 I 遺跡が所在し、先行する集落の一端を見ることができる。

1. 不動ヶ岡太田遺跡の概要 (図1)

不動ヶ岡太田遺跡は成田市南部、根木名川によって形成された谷津の西岸、標高約 36 m の台地上に位置する。令和 6 年度から調査が始まり、令和 7 年度の第 3 次調査まで発掘を行った。調査の結果、奈良・平安時代の集落を検出し、四面廂付掘立柱建物跡や、鉄鉢形土器などの仏教色の強い遺構・遺物を検出している。

谷津を挟んだ北東約 500m には、今回同時に調査

2. 周辺の環境と遺跡 (図2)

不動ヶ岡太田遺跡の周辺は、多くの谷津による複雑な地形が形成されている。古代において、この谷津を利用した津が造られ、印旛沼・手賀沼・霞ヶ浦に連なる、通称「香取の海」は水運交易の要衝として用いられていた。奈良・平安時代においては、この「香取の海」を用いた水運のほか、現在の国道 51 号に沿うような形で造られていた、旧東海道により物流や人々の行き交いがされていたものと考えられている。本遺跡の周辺は、この両方を利用する



図1 不動ヶ岡太田遺跡地形図

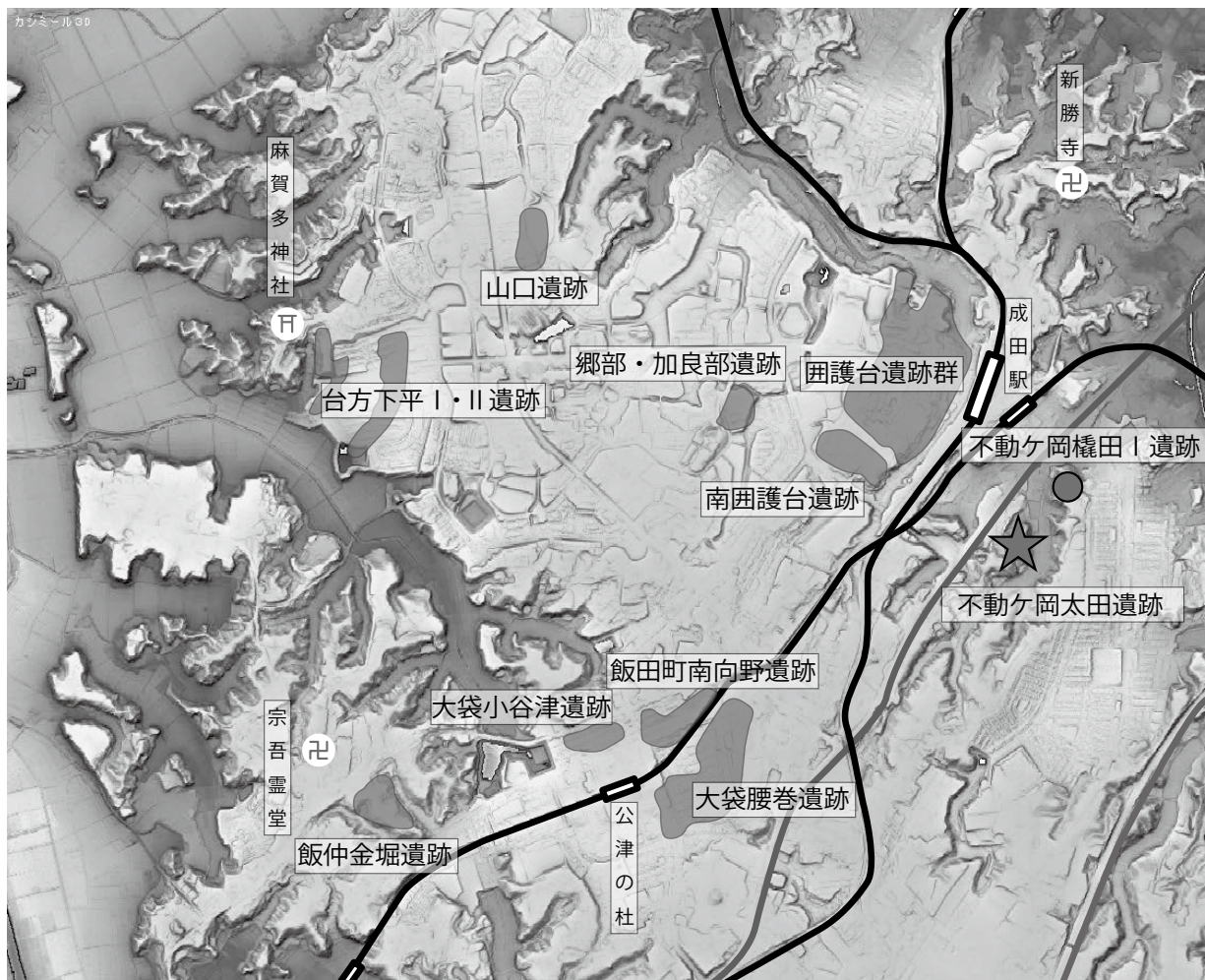


図2 不動ヶ岡太田遺跡周辺遺跡地図

うえで最適な地であったと考えられる。

本遺跡と同様に、四面廂付掘立柱建物跡を検出している遺跡として、郷部・加良部遺跡 (Loc15) と山口遺跡 (Loc20)、大袋小谷津遺跡がある。郷部・加良部遺跡は、現在の加良部台公園の北東に位置していた遺跡であり、8世紀前半から9世紀末にかけての集落である。出土遺物には多くの墨書土器があり、「寺」や「新寺」「忍保寺」といった寺に関連する特徴的なものが多い。この寺が、検出された四面廂付掘立柱建物跡を指すことは間違いのないと思われる。

山口遺跡は、現在の成田市中台小学校の周辺に展開した、8世紀中頃から9世紀末にかけての集落である。特徴として、掘立柱建物跡の約1世紀にわたる変遷を見ることができる。遺物も郷部・加良部遺跡と同様、寺に関する墨書土器が多く、「寺成」「忠

寺」「延忠」といったものが出土している。

大袋小谷津遺跡は、現在の公津の杜の北側に位置する遺跡である。後述する大袋腰巻遺跡とともに、地域の中心的集落であったと考えられている。ここでも、四面廂付掘立柱建物跡を検出しているが、仏教に関連すると思われる遺物の出土はない。そのため、寺院と断定することはできないが、例としてここで挙げておく。

本遺跡に最も近い大規模集落として、現在の公津の杜周辺にある大袋腰巻遺跡やJR成田駅の西側に広がる囲護台遺跡群がある。

大袋腰巻遺跡は7世紀末から9世紀中葉にかけて営まれた集落であり、本遺跡から約1.5kmの位置にある。奈良・平安時代の竪穴住居跡を238軒、掘立柱建物跡を134棟検出し、当時の中心的集落であると考えられる。

団護台遺跡群は7世紀中葉から10世紀にかけて営まれた集落であり、古墳時代後期の竪穴住居跡を205軒、奈良・平安時代の竪穴住居跡を261軒、掘立柱建物跡を37棟検出している。墨書土器の出土が多く、「寺社」や「寺」「酒杯」などが出土している。

これらの遺跡のほかに、現在の成田市はなのき台にある、台方下平Ⅰ・Ⅱ遺跡があげられる。両遺跡は、印旛沼に注ぐ江川により樹枝状に開析された台地上に位置している古墳時代中期後半から9世紀後葉にかけての集落である。両遺跡合わせると、古墳時代中期後半から後期にかけての竪穴住居跡が346軒、奈良・平安時代の竪穴住居跡が333軒、掘立柱建物跡が207棟である。

遺物は、畿内産土師器や威信財と考えられる帯金具など多様な遺物が出土している。

より広範に目を向けると、本遺跡の北西方向には、栄町の龍角寺古墳群や、埴生郡衙と考えられる大畑Ⅰ遺跡・向台遺跡が印旛沼に面して所在している。南方に目を向けると、二彩碗や三彩陶枕を出土した酒々井町・富里市の尾上木見津・駒詰遺跡がある。

また、奈良・平安時代（8世紀中葉）で唯一の瓦葺きで基壇を有する寺院である長熊廢寺と、有力首長の本拠地であると考えられる高岡遺跡群が佐倉市に所在する。

以上のほかにも、本遺跡は多くの遺跡が所在している地域にあり、古代から多くの人々が暮らしていた場所であったことが分かる。

3. 印旛地域における仏教伝播の流れ

現在の印旛地域への仏教伝播の様子がうかがえる寺院として、7世紀第3四半期頃に県内で初めに建立された寺院と考えられる栄町の龍角寺や、7世紀末に建立された印西市の木下別所廢寺が初期寺院として挙げられる。

その後、8世紀前半には佐倉市の長熊廢寺が成立するなど、拠点的な寺院の建立が見られる。

8世紀後半には、周辺地域にも広がり、小規模な寺院の成立が見られるようになる。また、8世紀第3四半期頃からは、仏教関連遺物の増加がみられる

ようになる。これは、国分寺建立の詔（741年）が出されたことが、その要因の一つであると考えられるだろう。先述した郷部・加良部遺跡、山口遺跡が営まれたのもこの時期である。

8世紀末から9世紀になるとさらに広範に仏教関連遺物の出土が見られ、最盛期を迎えることとなる。

4. 検出した遺構についての詳細

本遺跡の調査で検出した、竪穴住居跡は合計で21軒、掘立柱建物跡は2棟である。尾根状となっている台地の中央部に集中しており、およそ8世紀前半から9世紀末にかけての集落であると考えられる（図3）。中でも特徴的な第3次調査における1号住居跡と、四面廂付掘立柱建物跡について、考察を交えながら紹介していく。

(1) 第3次調査 1号竪穴住居跡（図4）

四面廂付掘立柱建物跡を検出した地点の北側に位置しており、長辺が4.0m、短辺3.9mの方形を呈している。堆積はかく乱によりわずかに荒れていたものの、遺構としての残りは非常によく、柱穴や周溝、カマド部を明確に確認することができた。特筆すべきは、掘り進めていくうちに、炭の検出が住居の全面で確認できたことであろう。炭化した柱が全面から放射状に検出しており、住居中心部からは屋根材と思われる炭化した植物も出土している。

遺物は住居の南東隅から出土した鉄鉢形土器が特徴的であり、仏教関連遺物として非常に貴重である。また、鉄鉢形土器の下からは火打ち金を出土している。火打ち金に関しては、火打石を伴ったものを住居内からもう1点出土している。火打ち金は、単独出土であると仏教関連遺物として断定できないが、今回1軒の住居跡から2点出土していることから仏教関連遺物として判断した。

その他の遺物に関しても、そのほとんどは床面直上からの出土であることや、煤の付着する遺物が多かった。

これらの状況を見てみると、本住居跡は鉄鉢形土器や火打ち金という仏教関連遺物が出土しているこ



図3 不動ヶ岡太田遺跡地形図・遺構配置図

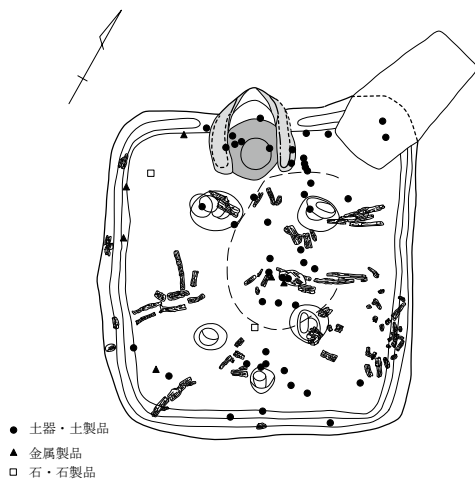


図4 不動ヶ岡太田遺跡(第3次)1号竪穴住居跡平面図・遺物出土状況

とからも、仏事に関連する人物が使用した空間であったことが考えられるだろう。また、炭の検出状況は焼失した状況を表している。遺物の遺存状況や煤まみれの遺物は突然の出来事をしており、失火により住居内のものを外へ持ち出す間もなく焼失したのだろう。

(2) 四面廂付掘立柱建物跡(図5)

本遺跡を特徴づける遺構が四面廂付掘立柱建物跡である。掘立柱建物跡に廂がついた建物跡であり、通常の掘立柱建物跡の周りに、さらにもう1周柱穴

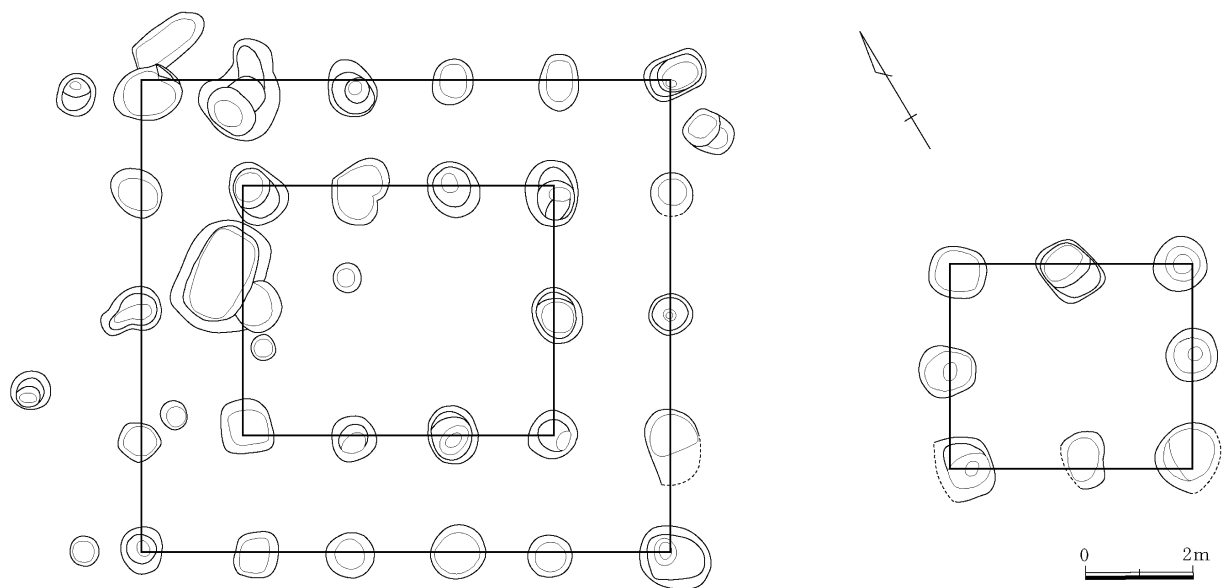


図5 不動ヶ岡太田遺跡(第3次) 掘立柱建物跡 平面図

がめぐることが特徴の遺構である。

奈良・平安時代における掘立柱建物跡は、それまでの時代と異なる点として、仏教関連の施設の可能性を考慮しなくてはならない。これは6世紀半ばに仏教が伝来して以後、全国に伝播し、奈良時代には国分寺建立の詔が出されることから、推測できることである。本遺跡周辺でこのような四面廂付掘立柱建物跡を検出しているところは少なく、先述した郷部・加良部遺跡、山口遺跡や大袋小谷津遺跡で検出しているのみである。

今回検出したものは、^も身舎が3間×2間、廂部が5間×4間である。郷部・加良部遺跡と山口遺跡で検出したものと比べると、柱の掘方形状は円形ないし不整円形で、廂部の掘方が身舎部に比べて浅いという特徴が一致している。山口遺跡に関して言えば、規模も同等である。

また、建物の横にもう1棟掘立柱建物跡を検出している。この建物は2間×2間で四面廂付掘立柱建物跡と軸が合うように建てられているように見える。そのことから、付属施設であることも考えられるが、詳細は想像の域を出ない。

また、四面廂付掘立柱建物跡を挟んだ反対側にも、掘立柱建物跡として組み合わせられる可能性のある土坑を検出している。しかし、廻るように検出して

いないことから確証を得ることはできない。

検出した四面廂付掘立柱建物跡は、本調査区内で最も標高の高い位置にあり、寺院を中心とした集落形成がされていたものであると考えられる。

5. 仏教関連遺物について

仏教関連遺物を出土している遺跡は、本遺跡の周辺に多く所在し(表1)、遺跡分布(図6)をみると、この地域一帯での仏教関連遺物の出土が多いことがわかる。本遺跡からはそれほど多くないが、関連すると考えられる遺物を数点出土している。

・墨書土器

本遺跡からは、「宗」や「仟」と書かれた墨書土器が出土している。「仟」に関しては、山口遺跡でも同様に出土している。また、「榮」と書かれた墨書土器も出土している。これは明らかに文字を認識して書かれており、達筆である。酒々井町の飯積原^{いづみはら}山遺跡からは「榮信」と書かれた墨書土器が出土しており、僧侶の名前であると考えられている。断定はできないが今回出土した「榮」も人名である可能性がある。

このように、共通した文字の出土はあるが、直接仏教に関連すると思われる「寺」と書かれた墨書な

どは見つかっていない。周辺遺跡の例を見ると、先述した郷部・加良部遺跡、山口遺跡、圀護台遺跡群をはじめ、中台遺跡、郷部・堀尾遺跡、外小代遺跡、久能高野遺跡、野毛平植出遺跡、大袋台畑遺跡、飯仲金堀遺跡で「寺」関係の墨書が出土している。

しかし、中心的集落であったと考えられる大袋腰巻遺跡からは、「寺」に直接関係する墨書土器の出土はなく、代わりに「神」関係の墨書土器の出土が見られている。このことについては、ここで深く述べることはできないが、中心集落と一般民衆とで、明確に宗教観に差異があった可能性も考えられるだろう。

本遺跡については、中心集落からほど近いという立地であることから関連が考えられる。共通点として、本遺跡では「埜」と書かれた墨書が出土している。これは、大袋腰巻遺跡でも出土しており、また佐倉市の高岡大山遺跡からは多数出土している。このほかの周辺遺跡では出土しておらず、本遺跡が中心集落との関係を持っていた可能性の一因として考えられることであろう。

・鉄鉢形土器

口径約20cm、高さ約10.5cmの須恵器である。仏鉢とも呼ばれるこの土器は、比丘六物と呼ばれるものの一つで、もともとは仏及び僧・尼が護持する食器であった。これが日本に渡ってきたときに、仏前に供物を盛る供膳具として用いられるようになったと考えられている。今回出土したのもその一種であると考えられるだろう。時期は共伴している遺物から8世紀末～9世紀初頭と考えられる。

周辺遺跡では、郷部・加良部遺跡、山口遺跡、中台遺跡、大袋山王第2遺跡、飯田町南向野遺跡から出土している。いずれも8世紀後半から9世紀前半にかけてのものと考えられることから、時代的な共通点もあるだろう。

・火打金と火打石

火打金は9世紀の『令集解』のうち「軍防令」の規定において、兵士のうち50人に1人は必ず携行

しなければならないという条文があることから、仏教関連遺物であることは断言しにくいものである。しかし、今回の住居跡から出土した火打金は2点であり、そのうち、先述した鉄鉢形土器の下から1点出土している。仏事に用いられたとすれば、住居内から2点出土していることは考えられるだろう。

火打金と一緒に火打石も出土している。石材はメノウであり、火打石として使われる石である。この2つが共に出土したことは、それだけ遺物の遺存状態が良く、当時の使用状況が見られる状況であることがわかるだろう。

6. 不動ヶ岡太田遺跡の全体像

本遺跡は住居跡全21軒のうち、8世紀後半から9世紀前半にかけての住居跡が7軒と最も多く、続いて9世紀前半から中頃の住居跡が5軒、8世紀中頃の住居跡が3軒であり、それ以外は散逸しているという検出状況である。このことにより、本遺跡は8世紀後半から9世紀前半を中心に、8世紀中頃から9世紀中頃の約100年にかけて営まれた集落だと考えられる(図7)。

この年代は先述した郷部・加良部遺跡や山口遺跡とも同時期であり、大規模集落である大袋腰巻遺跡や圀護台遺跡群とも時代的な重なりがある。特に、同様に四面廂付掘立柱建物跡を検出している山口遺跡と郷部・加良部遺跡とは関連性があるものと考えられるだろう。

郷部・加良部遺跡と山口遺跡、そして本遺跡は半径約2km圏内という近さで所在している。その南方には大袋腰巻遺跡が、北方には圀護台遺跡群が所在している。大袋腰巻遺跡や圀護台遺跡群が中心的集落と考えると、その周囲に仏教施設を建設したことになる。集落内には建わず、その外側に造った理由まではわからないが、明確な祭祀空間と、居住空間を分けて暮らしていたものであると想像することができるだろう。

いずれの遺跡も8世紀後半から9世紀前半にかけてが最盛期であり、10世紀にはほとんど消失している。このことは、地域の中心的集落がほかの場所

表1 周辺仏教関連遺物出土遺跡一覧

遺跡名	時代	仏教関連の時期	仏教関連遺物	仏教関連墨書土器
山口遺跡	8世紀後半～9世紀	8世紀後半～9世紀	土師器鉄鉢形土器	「寺成」「寺」「忠寺」 「□／寺返カ」「佛」 「仵／寺」
郷部・加良部遺跡	8世紀第2四半期～9世紀第3四半期	8世紀後半～9世紀	須恵器鉄鉢形土器、瓦塔	「忍保寺」「大寺」 「新寺」「寺」
中台遺跡	6世紀第3四半期～9世紀後半	9世紀第2四半期	須恵器鉄鉢形土器、瓦塔	
郷部・堀尾遺跡	8世紀前半～9世紀	9世紀前半		「寺」
外小代遺跡	弥生時代後期古墳時代前期 8世紀前半～9世紀後半			「寺カ」
久能高野遺跡	8世紀後半～9世紀後半	9世紀第2四半期～後半		「桑田寺」「寺」「□」 (寺カ)／井」
匡護台遺跡群	6世紀前半～10世紀	8世紀第4四半期～9世紀初頭	瓦塔	「寺」「寺杯」「寺社」
野毛平植出遺跡	8世紀中葉～10世紀後半	9世紀前半		「手寺」
大袋山王第2遺跡	6～9世紀	9世紀	土師器鉄鉢形土器	
大袋台畑遺跡	8世紀第2四半期	8世紀第2四半期		「赤男(界)寺」「赤」 寺・崎寺」「□寺」
飯仲金堀遺跡	8世紀第3四半期～第4四半期	8世紀第3四半期	奈良三彩托	「寺カ」
飯田町南向野遺跡	8世紀中葉～9世紀中葉	8世紀末～9世紀初頭	ロクロ土師器鉄鉢形土器 2点	

千葉県文化財センター研究紀要18より抜粋・加筆

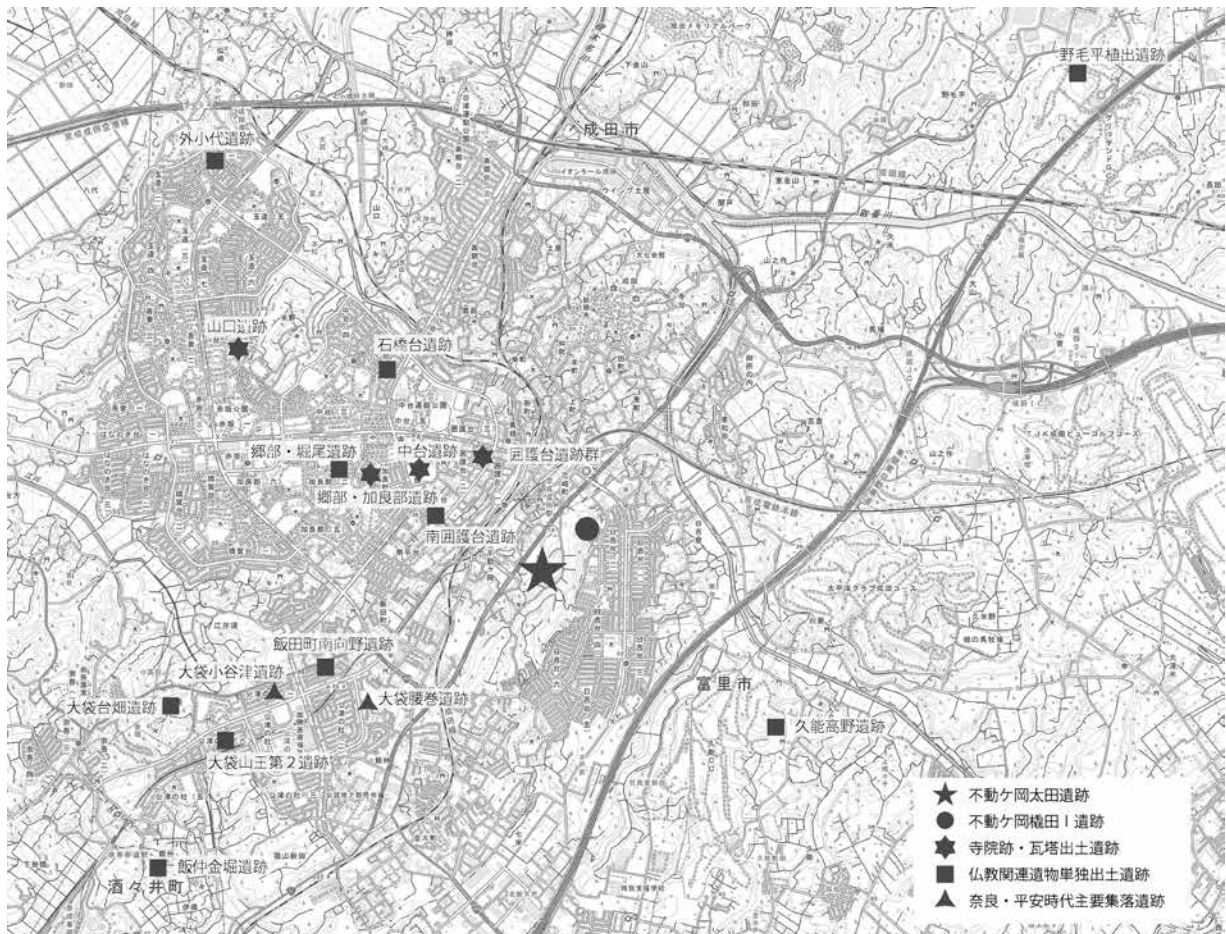
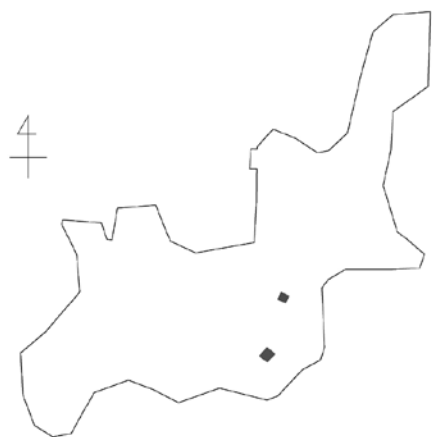
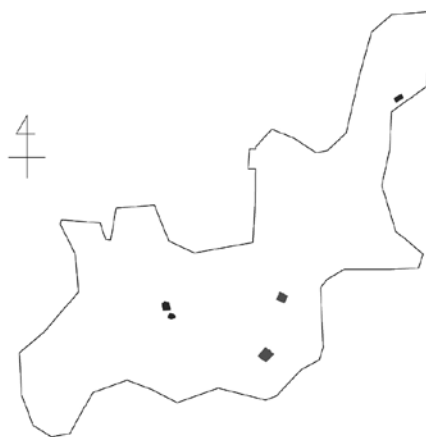


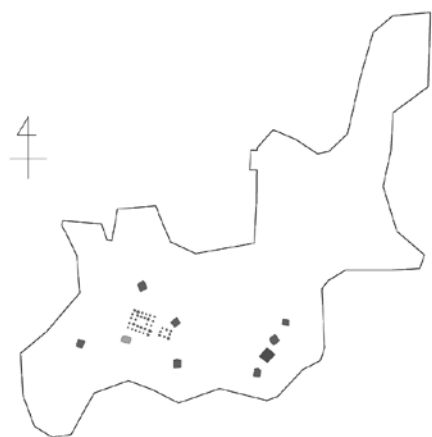
図6 仏教関連遺物出土遺跡一覧地図



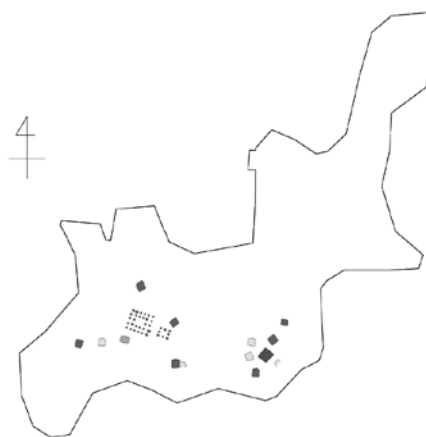
8世紀前半



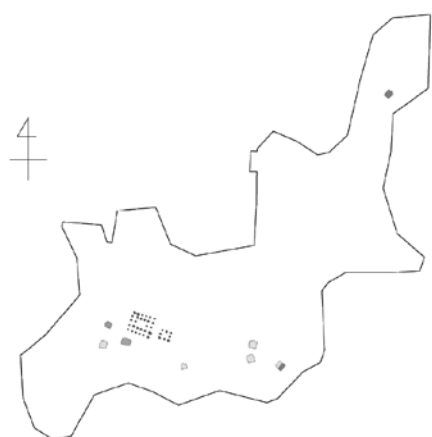
8世紀中頃



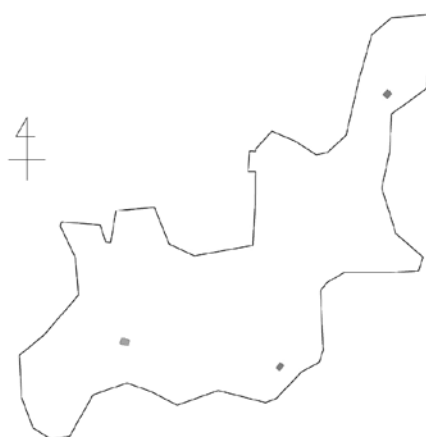
8世紀後半



9世紀前半



9世紀中頃



9世紀後半

図7 不動ヶ岡太田遺跡住居変遷一覽

へ移り、それに伴って仏教施設も役割を終えたもの
と考えることができるだろう。

7. まとめ

ここまで、本遺跡の調査成果をもとに、周辺遺跡
との関連とその特徴を紹介してきた。ここで、本遺
跡における四面廂付掘立柱建物跡が寺院であるとい
う根拠3つを以下に記す。

①四面廂付掘立柱建物跡の特殊性

- ・ 周辺で例の少ない四面廂付掘立柱建物跡である
- ・ 台地上で最も高い場所での検出

②同集落内での仏教関連遺物の出土

- ・ 仏教関連遺物である鉄鉢形土器の出土
- ・ 火打金を複数出土という特殊例

③同時期の遺跡との関連

- ・ 山口遺跡、郷部・加良部遺跡と同時期、同様の
遺構と出土遺物
- ・ 墨書土器「仟」「榮」は、仏教関連施設・仏教
関連遺物を検出・出土した遺跡と同様の出土遺
物

以上により、本遺跡は寺院を持つ集落という性質
を持っているものと考えられる。

本遺跡は寺院を持つ小規模集落であり、寺院を中
心とした集落形成がされていたものと考えられるだ
ろう。また、中心的集落である大袋腰巻遺跡、高岡
大山遺跡の墨書土器と同様のものを出土したことは
一考の余地があるだろう。

このことにより、地域一帯における本遺跡の役割
がより明確に解明されていくことを期待したい。

参考文献

- ・ 加藤貴之 2008 「古代印旛郡における掘立柱建物跡群の様相―掘立柱建物
の構成から見た居宅・郷家―」『印旛郡市文化財センター研究紀要6』財団
法人印旛郡市文化財センター
- ・ 1997 『千葉県文化財センター研究紀要18』財団法人千葉県文化財センター
- ・ 2004 『千葉県の歴史資料編 考古4 (遺跡・遺構・遺物)』千葉県
- ・ 1996 「出土文字資料集成」『千葉県の歴史資料編 古代』千葉県
- ・ 赤井博之 1998 「古代常陸国新治郡の基礎的研究 (1) ~奈良・平安時代
の須恵器編年を中心に~」『婆良岐考古 第20号』婆良岐考古同人会
- ・ 須田勉 1971 「平安初期における村落内寺院の存在形態」『古代探叢Ⅱ』
早稲田大学出版
- ・ 須田勉 1999 「東国における古代民間仏教の展開」『国士館大学文学部人
文学会紀要第32号』国士館大学文学部人文学会
- ・ 1981 『公津原Ⅱ』財団法人千葉県文化財センター
- ・ 1994 『公津東遺跡群Ⅰ』財団法人印旛郡市文化財センター
- ・ 1995 『公津東遺跡群Ⅱ』財団法人印旛郡市文化財センター
- ・ 1998 『公津東遺跡群Ⅲ』財団法人印旛郡市文化財センター
- ・ 1990 『成田市計画事業成田駅西口土地区画整理事業地内埋蔵文化財発掘
調査報告書』成田市圏護台遺跡発掘調査団



图版1 墨書集合写真